

一 追悼・安森敏隆先生 二

中西 健治

さる一月九日午後三時二十分、我が先輩、安森敏隆先生が亡くなられた。先生は敬虔なキリスト教信者であったことから、葬送に関する一切がその宗教の形式通りに行われ、悲しみの内にお別れをした。いま、あらためてこの一文を認めながら、こみあげて来るものがある。誌面をお与えくださった編集部に感謝します。

○

先生は一九四二年一月六日、広島県高田郡（現・三次市）粟屋村にてお生まれになった。広島県立三次高等学校をご卒業後、一九六〇年本学文学部日本文学専攻に入学。和田繁二郎・国崎望久太郎両先生について近代文学研究の道に自身の研究方針を見定められ、その後、大学院を終えられた後、平安女学院高等学校教諭、宇部短期大学講師・助教を経て、一九七七年四月より梅光女学院大学の教授を勤められた後、一九八八年四月から同志社女子大学短期大学部教授、翌年、同志社女子大学教授に就任され、二〇一二年四月に同志社女子大学の名誉教授にられた。この間、日本キリスト教文学会、日本近代文学会、全国大学国語国文

学会などの要職にも就いておられた。先生の歌の直接の師匠は和田繁二郎・国崎望久太郎両先生（共に本学教授）であったが、本学入学前の三次高校では、文芸部顧問であった山広実美氏（本学卒業生）の指導を受けておられ、「蛍雪時代」の文芸欄の荒正人選に屢々入選され、更に溯つては三次中学校粟屋分校で堅木静子氏に短歌の手ほどきを受けていたのであった。このことから明らかのように、先生の辿られる道はすでに用意されていたと言つても過言ではない。大学院在籍中の一九六五年に第四次立命短歌会を起し、「立命短歌」を創刊され、自ら「生涯の畏友」と称して憚らない塚本邦雄との交流もその頃に始まったのであった。

○

先生のお人柄を知る人はこぞって、先生の豪放磊落なお姿とお声を思い浮かべるはずであろう。立命館大学をこよなく愛し、後輩をも大いに気遣つてくださり、一方で、短歌創作を進められたのである。小生がこのような文を書く仕儀に至ったのか。それは一にして、ポトナム短歌会に籍を置き、京都歌会や須磨歌会で多

くの短歌を愛好する人たちとの交流の縁を作っていたただいたからに他ならない。ある夏の日、学校で先生にお会いした時、「中西君、歌よめやー」と独特の広島弁で声を掛けられたのが最初であった。ほどなく小生は病臥することになったが、病床で詠んだ短歌試作をお目に掛けると、先生はずいぶん喜ばれ、ぜひ京都歌会に出席するよう勧められた。先生は実にほめ上手で、歌会の出詠者の作にも、「いい歌が出たねー」と繰り返して仰つて、その歌の核心を撞いた批評をもの見事に言揚なされた。

先生はながらく本学の教壇にも立たれ、後輩の指導にあたられた。斎藤茂吉、塚本邦雄の研究者であると同時に、ポトナム短歌会で大いに経営手腕を発揮され、また、ケータイ短歌、介護短歌という分野も切り開かれた注目を集められたのであった。特に介護短歌の領域では、先生の著書『大学教授の介護日記 介護・男のうた365日』をはじめ、NHKの介護百人一首に至るまで、近來の社会状況ともかかわって大いに注目されるようになった。『寝たきりの母（義母）を毎日身近でみていたら、とめどもなく五七五七七のうたが奔騰して、何を見ても、母の命に収斂して『うた』がわき上がるように出てきたのである』（『介護・男のうた365日』あとがき）と、歌の湧き上がる現場を生々しく伝える文言は迫力に満ちていた。介護は命の最前線であること、それを最も鮮明に歌として結びつけ生きる力にすることを提唱し、実践されたのもあった。

○

先生には三つの歌集がある。『沈黙の塩』（一九七九年二月）、『わが大和、わがシオン』（一九九六年十一月）、『百卒長』（二〇〇八年十月）であるが、いま、第三歌集を中心に記しておく。

【おおき手を差し出すことくなくばかせて俊成の枇杷出迎えくるる】（二〇頁）

お住まいの近くに藤原俊成の墓所があり、この地をこよなく愛されていた。「わが深草、わが稲荷」という標題に「我が家の前の道を隔てた斜め向かいには藤原俊成の奥津城がある」と明記もされている（一三頁）。先生は、来る人拒まずのお考えを貫かれていた。その先生にして俊成は、俊成の奥津城は心の抛り所であったように、この地を歌に詠まれては多い。

【茂吉の未刊歌集『くろがね』いできたり嗚呼靖國近き神田古本屋街】（四一頁）

先生のご研究の根幹は斎藤茂吉の歌であった。その茂吉が戦前に詠んだ歌に、自身で朱を入れ、新しい歌集を編んでいることは知る人ぞ知る貴重なものである。それが先生の書架に収まったのである。もちろん大枚を代価としてのこと。その時の感動と南太平洋で戦死なさった父君をお祀りする靖國神社への複雑な思いとをこめてこの歌はある。いま茂吉自筆本は先生の強いご遺志によって本学の白楊荘文庫に収められている。

【蟬の鳴く九月半ばの立石寺 芭蕉と茂吉 茂吉と豊隆】

(五九頁)

日本文学の大きなうねりを描いて気宇壮大な気持ちにもさせられる歌である。時と場所を目交に上せれば一層の広がりを持つはずだ。

【ふかぶか紅葉の山を染めゆきて城南宮は天ささえ立つ】

(六九頁)

伏見の城南宮で春秋に行われる曲水の宴に参宴された時の歌で、先生は長らくこの宴に歌人として出られた。ユーチュウブなどで先生の姿を見ることもできる。平安時代文学を専攻する小生にこの役目を譲ってくださったのも先生であった。平安貴族の雰囲気、を味わうのも何かの役に立つだろうねとも仰っていたことを思い出す。

【アフガンもイラクもついに忘れられ飽食日本に汚職みちみつ】

(八九頁)

一方で時代の流れにも敏感であった。これもその時の歌。アフガン戦争やイラク戦争などきな臭い雰囲気、全世界に広がり、日本ではさまざまな汚職事件が起こっていたことを慨嘆された歌の一つ。

○

安森先生の側にいると言いつれぬ安心感があった。それは学問的にも通じる安心感であり、日本の近代文学研究者にも通じるも

のがあると思ったからである。先生には『斎藤茂吉幻想論』（おうふう社刊）、『斎藤茂吉短歌研究』（世界思想社刊）などが示す通り、茂吉研究は生涯の研究課題であった。二〇一一年に本学に佐藤佐太郎の短歌論で学位請求された秋葉四郎氏がある。本学の瀧本和成教授が主査となられ、安森先生と小生が副査となって審査を行った。佐藤佐太郎は茂吉の一の弟子であり、当の秋葉四郎氏も茂吉研究では高名な方である。現在、山形県にある斎藤茂吉記念館の館長を勤められている。東西の茂吉研究者が対面する場に小生ごときが陪席することができたのも、安森先生のご配慮によるものであった。その審査評は瀧本教授と安森先生がお書きになったが、骨格は安森先生の筆になる。翌年（二〇一二年）三月、秋葉氏は本学の学位（乙号第五〇九号）を授与され、後に氏は、第十一歌集『みな陸を向く』の中で次のように詠んでおられる。

賀茂川のうへの床にて酒を飲む未来よりとどくひかり感じて

(六月八日、安森敏隆・中西健治両先生にまみゆ)

○

毎月催されるポトナム歌会のと、先生はきままって國末泰平氏などを誘い、ときには小生にもお声を掛けて下さり、ご馳走になった。ある秋のはじめ、左京区の熊野神社近くの小さな店で大いに語り合った。そのすぐ後に國末氏が亡くなり（平成二十八年十月二十一日）、先生は次の歌を詠まれた。

- ① 「豪快」を呑みしは五日前いっかのこと 國末泰平十時十七分に逝く
 ② 和田周三 國崎望久もくくたろう太郎の弟子にして共に学びし「人」である
 こと

③ 「ポトナム」の帰りの酒も好きなりし黙々と呑む天下泰平

〔ポトナム〕九十三卷十二月号

その一年後に何と先生までもがかの国で國末氏と酒宴をされようとは。あのとき、広島カープが絶好調であった。テレビに時々目をやりながら、「オーツ、ヤツタネー」とか言つてはしゃいでおられたお姿はまるで子供のようでもあった。大いに飲み、大いに語り、大いに学ぶ。全身、全力で何事にも立ち向かわれる姿勢は後進にも身を以て示された研究者のとるべき態度そのものでもあった。

④ 球場は真っ赤に炎えて十連勝 カープ勝つ日の広島かえり

〔ポトナム〕九十四卷六月号

この歌を含む六首が「ポトナム」誌に掲載された安森先生の最後の歌であった。我々は何も気づかなかつたのか。その六首の中には、今から考えると不思議な、そして逞しいメッセージが含まれていることを。

⑤ あべちゃんもかごいけはんも嘘を吐きエープリルフルはどこ

へゆくやら

⑥ 宇宙から見れば小さきことならん生き死にのこと 飲食おんじきのこと

⑤からは、現実社会を透徹した目で捉えそれを短歌という形式で歌い上げることが重要であると言うこと、現実社会と遊離したところで短歌が成立するものではなく、常に現実を抉り取る姿勢を保ち続けるものであること。そして⑥には先生の、おそらくは常に抱いておられた人生観が濃密に反映されたものであるということ。そこに斎藤茂吉を一途に研究し、短歌を詠じ続けて来られた信念が塗こめられていたのであった。(追記・⑥については、先生のご逝去の報道後に発刊された「現代短歌新聞」(二月五日)に、「ポトナム」発行人である高島静子氏が「安森敏隆氏を悼む学者、歌人、信仰者として」と題する長文の追悼記事を執筆され、その末尾がこの一首で結ばれている。嗚呼。)これらの歌が掲載された誌の次の号には安森夫人である淑子さん(本学日文学卒業生)の歌が出たのである。

⑦ 老いゆく日の哀しさ嬉しさこもごもに痛めるわれに夫は料理す
 ⑧ まさに今老老介護の始まりなり まあゆつくりと命見つめん
 ⑨ 苦を苦とし楽を楽とし生きゆかん君の病に付き添いながら
 ⑩ 欠詠をせず作りてゆかんとする君に教わりし歌にしあれば

今にして思えば、⑨の「君の病」とあることから、先生の病気が

尋常でないものとして進行していたのであり、⑦はそれでもなお夫人を庇いながら厨房にたれた先生の姿があり、⑧⑩からは共に歌を仲立ちとして生きようとする夫婦像を読み取ることができよう。「介護」という場をまさに体現されていたのであった。

○

「ポトナム」九十五巻十月号には追悼号が編まれ、先生を偲ぶ会も開かれることになっている。立命館大学の小泉三教授と百瀬千尋によって興された短歌結社の「ポトナム」が、記念すべき百周年を前に大きな柱を失ったのは返す返すも痛恨の極みと言うほかない。安森敏隆先生のご冥福を心から祈念する。

(なかにし・けんじ 本学元教授・ポトナム代表)